

〔物語〕関東大震災からの復興と築地小劇場の興起―小山内薫、土方与志、山本安英、東山千栄子―

第十二節 チェーホフの戯曲と築地女優陣

（第二年二月および第四年二月『桜の園』）

大正十四年二月一日から築地小劇場では、アントン・チェーホフの代表作『桜の園』が供せられた。戯曲自体の著名度と小山内薫の美事な演出によって、この舞台は連日お入りの盛況を呈し、公演日も予定より五日間延長された。

第一幕は女地主ラーネフスカヤが長期のバリ在住からロシアへ帰郷する場面で開ける。懐かしいわが家で彼女を驚愕させたのは、産業の発展と都市化の進捗によって、亡夫の遺産たる領地が競売に付せられる事態であった。「第三幕は売られる邸宅の舞踏会に始まって、」と小山内は解説した。「買った者の極度の興奮と、買われた者の極度の悲哀との交錯に帰る。第四幕は〈見せない涙〉、〈隠された悲哀〉に終始する最後の静寂の一楽章である。作者はこの一幕に、詩人の限らない心優しさと、科学者の冷静な認識との交錯を見せている。」「私はこの頃この戯曲を唯物史観から見て、特別に興味を覚えている。そうしてその見方から更に新しい演出を企てている。すなわち貴族階級の没落、資本階級」の台頭、無産階級の予言、その間に於けるインテリゲンチヤの存在地位―

こうした点に新しいエンファシスを置いた演出である。」①

チェホフ作米川正夫訳『桜の園』四幕

人 物

ラーネフスカヤ夫人	女地主	アーニヤ	その娘
ヴァーリヤ	その養女	ガーエフ	ラーネフスカヤ夫人の兄
ドゥニャーシャ	小間使	ロバーヒン	商人
ビーシチック	近隣の地主	トルフィモフ	大学生
シャルロッタ	家庭教師		

第一幕

これまで子供部屋と呼ばれている部屋。一つの扉がアーニヤの居間へ通じている。夜中前、間もなく太陽の昇りそうな気配。もう五月で、桜の花が咲いているが、外は朝寒で冷々する。部屋窓はみな閉まっている。……二代の台の馬車が家へ乗り付けた物音。ラーネフスカヤ夫人、アーニヤ、旅行服をつけ犬の鎖をもったシャルロッタ、外套を着、頭巾を頭に被ったヴァーリヤ、ガ

① 『『桜の園』の演出者として』『小山内薫演劇論全集 第二卷（築地小劇場篇上）』二八二頁。

―エフ、ピーシチック、ロバーヒン、包みと傘をもったドゥニャシャ、手荷物をもった下男等、
一同舞台を通りかかる。

アーニャ　こちらから行きましょう。ママ、この部屋覚えてらして？

夫人　（悦しそうに、涙の隙から）子供部屋よ！

ワリーヤ　何て寒いんでしょう。わたし手がかじかんで了ったわ。（夫人に）お母さま、あなたのお部屋ね、白い方もすみれ色の方も、どちらもそっくり元の儘ですわ。

夫人　わたしの子供部屋、可愛い美しい子供部屋。わたしがまだ小っちゃな子供の時分、ここに寝たもんだわ。（泣く）今だってわたしまるで子供のようだわ。（兄とヴァーリヤ、それからまたもう一度兄を接吻する。）ときにヴァーリヤはやっぱり元のまんまね。まるで尼さんのようだわ。ドゥニャーシャもすごいにそれと分った。（ドゥニャーシャを接吻する。・・・

ロバーヒン　いやまあ、一寸手短に申しまじょうかな。あなたはもう御存じですが、お宅の桜の園は借財の抵当に売られる事になってるんです。八月の二二日が競売と決りました。しかし奥さん、御心配は要りません。枕を高くしてお休み下さい、逃げ道はありますよ。わたしの案はこういうのです。どうぞ御静聴を願います。お宅の領地は町から十五露里しか離れてなくって、その傍を鉄道が通っています。だからもしこの桜の園と川添いの土地一帯を、細かく別荘用地に区切ってそれを貸地に出したら、どんなに少くとも二万五クルーブリの年収はお手に入ります。失礼だが、何と云う馬鹿げた話だろう！

ゲーエフ　わたし、あなたのお話が十分合点が行きませんわ。・・・

ロバーヒン　場所は素敵ですし、河は深いし、ただし勿論少し片付けて綺麗にしなきゃなりませんかね。例えばまあ古い建物はみんな取り除けて了うんです。現にこの家なんぞもう何の役にも立ちやしないんですからね。そして古い桜の園も伐り倒して了う。

夫人　伐り倒して了う？あなた、失礼ですが、何にもお分りにならないのね。もしこの県下一円に何か面白い、というより素晴らしいものがあるとすれば、それはうちの桜の園だけです。

第三幕

アーチで広間と隔てられた客間。つり燭台がともっている。控室ではユダヤの音楽隊の演奏が聞える。・・・やがて一同舞台へ現れる。

ピーシチック　競売の様子はどうかだったね？さあ話して聞かせなさい！

夫人　桜の園は売られて了って？

ロバーヒン　売られて了いました。

夫人　誰が買ったんですの？

ロバーヒン　わたしが買いました。（間）

夫人　茫然自失する。もし傍に椅子と卓がなかったら、卒倒したかもしれない。ヴァーリヤ腰から鍵の束を外し、それを室のまんなかに叩きつけて退場。

ロバーヒン　わたしが買ったんです！まあ皆さん、お願いですから待ってください。わたしは頭の中がぼうとなつて、口が利けないんです。（笑う）・・・わたしは抵当額の上に九万クルーブリ張り込

んで、結局わたしに落ちた訳なんです。桜の園はもうわたしのものです！わたしのものなんです。（からからと笑う。）ああ、夢ではないか、桜の園がわたしのものになるなんて！……（オーケストラの調子を合する音が聞こえ）おうい楽隊、やってくれ。おれは一つ聞きたいんだ！みんな来て見るがいい。エルモライ・ロバーヒンが桜の園に斧を入れて、木がどしんどしん地びたへ倒れるのだ！やがて今にここへ別荘が一杯建って、孫や曾孫はこの土地に新しい生活を見ることができなのだ。楽隊、やれ！

軍隊の奏楽が始まる。夫人は椅子に身を落して烈しく泣く。……

ビーシチック（ロバーヒンの腕を組んで小声に）あの女は泣いてるんだよ。広間の方へ行こう。一人きりにして置く方がいい。さア行こう。（腕を組んで広間へ連れて行こうとする。）

ロバーヒン 一体どうしたと云うのだ？楽隊、もっと元氣よくやれ！何でもおれのお気に召したようにやるんだ！（皮肉な調子で）新しい地主さまのお通りだ。桜の園の持主さまのお通りだ。（過って卓に突き当り、危く燭台を落しかける）なアに何だって弁償してやらア！

ビーシチックと共に退場。広間にも客間にもラーネフスカヤ夫人の外誰もいない。夫人は椅子に坐つたまま、身を縮めて烈しく涕泣する。楽隊は静かに演奏している。アーニャとトロフィーモフ足早に登場。アーニャ母に近寄り、その前に跪く。トロフィーモフは広間の入口に立ち止まる。

アーニャ ママ！ママ！あなた泣いてらっしゃるの？わたしの大切な優しいママ！美しいママ！わたしあなたが大好きなの。わたしお祝いしますわ。桜の園は売られました。もう無くなってしまいました。それは本当ですわ。それは違いないわ。だけどママ！泣く事はなくってよ。あなたの生活

はまだ先に残ってますもの。そしてあなたの美しいきれいな心が残ってますもの。行きましょう、わたしと一緒に行きましょう。ねえママ、ここから出て行きましょうよ！そしてこれよりもっと美しい、新しい庭をこしらえましょう。ママもそれを見たらお分りになるわ。そして静かな深い悦びが、丁度夕方の太陽のように、あなたの心に射し込んでよ。そうしたらママもきつとお笑いになるわ。行きましょう、ママ！行きましょうよ！

第四幕

第一幕と同じ舞台面。ただ窓にカーテンもなければ壁に額もない。ただ少しばかりの家具が、まるで払いものか何ぞのように、片隅に積み重ねてある。空虚の感。……舞台裏でがやがやと云う声がする。百姓達が別れの挨拶に来たのである。「ありがとう、皆の衆、どうも有難う」というガーエフの声。……夫人、ゲーエフ、シャルロック登場。

夫人 もう十分くらいしたら馬車に乗りましょう。（部屋を一瞥する）さよなら、懐しいわたしの家、古いふるいお爺さん。この冬が過ぎて春が来たら、もうお前もこの世にいないくなるのねえ。取り毀されて了んだわねえ。ああこの壁はどんなに色々な事を見て来ただろう！（娘に熱い接吻をする）わたしの大切なアーニャ、お前は嬉しそうに笑み輝いてるねえ。お前の目はまるで二つのダイヤモンドみたいよ。お前満足なの？ 心から？

アーニャ ええ、心から！ 新しい生活が始まるんですもの、ママ！……
夫人 行きましょう！

ロバーヒン みんなここにいますな？あちらには誰もいませんね？（左わきの戸に鍵をかける。）ここに道具が積んであるから、閉めとなくちゃ。さア行きましょう！

アーニャ さよなら、わたしの小家！さよなら、古い生活！

トロフィーモフ 新生活万歳！（アーニャと共に退場）

ヴァーリヤ室に一瞥を投げて退場。ヤーシャ、犬をつれたシャルロット、同じく退場。

ロバーヒン じゃ春までな。皆さん、お出でなさい。さよなら！（退場）

夫人とガーエフただ二人だけ残る。二人は丁度これ wait していたように、互いの首に両手を掛け、人に聞かれないようにと心配しながら、低い声で忍び音に慟哭する。

ガーエフ （絶望の体で）ああ妹、妹。

夫人 おお、わたしの可愛い、優しい、美しい庭！わたしの生活、わたしの青春、わたしの幸福、さよなら！さよなら！

アーニャの声 （愉快げな、招きいざなうような調子で）ママ！

ドロフィーモフの声 （愉快げな興奮したような調子で）おう！

夫人 もう一度お名残りに壁や窓を見ましょう！この部屋は亡くなったおっ母さんが、よく好んでお歩きになったものだけ。

ガーエフ 妹、妹！

アーニャの声 ママ！

ドロフィーモフの声 おう！

夫人 いま行きますよ！

兩人退場。舞台空虚。方々の戸に鍵をかける音が聞えて、やがて馬車の動き出す響。辺りはしんとする。静寂の中に木を打つ斧の鈍い音が、淋しくもの悲しく響き渡る。①

『桜の園』歴代の配役

	近代劇協会	築地小劇場	築地小劇場	新劇合同公演
ラーネフスカヤ夫人	女地主	大正三年	大正一四年	昭和二年
アーニャ	その娘	上山浦路	花柳はるみ	東山千栄子
ヴァーリヤ	その養女	衣川孔雀	若宮美子	東山千栄子
ガーエフ	ラ夫人の兄	一条潮路	山本安英	村瀬幸子
ドウニャーシャ	小間使	沢田正二郎	小野宮吉	丹阿弥谷津子
ロバーヒン	商人	玉村歌路	山本安英	村瀬幸子
		栗島狭衣	薄田研二	薄田研二
			室町歌江	高橋豊子
			横田儔	杉村春子
				丸山定夫
				三島雅夫

ビーシチック	地主	生方賢一郎	楠田清	三津田健
トルフィモフ	大学生	伊庭孝	千田是也	伊達信
シャルロット	家庭教師	田村寿美代	田村秋子	岸輝子
ファイルス	老僕	上山草人	汐見洋	中村伸郎
演出		小山内薫	小山内薫	青山杉作

『桜の園』の日本初演は、近代劇協会により大正三年七月の二六日より三一日まで帝国劇場で行なわれた。文芸協会を離れた上山草人は伊庭孝とともに同劇団を組織し、その前年森鷗外の推挙によりゲーテの戯曲『ファウスト』を同じく帝劇で上演した。市井で偶々見出された衣川孔雀が、草人の妻山川浦路とともにこの大作に抜擢される。『桜の園』でもふたりの女優が主役を務め、男役には上山草人をはじめとし、沢田正二郎も参加した。

① このとき演出を担当した小山内薫は、すでに三年前ヨーロッパ旅行においてモスクワ芸術座の『桜の園』を観劇し、舞台の細部について綿密な覚書を綴っている。近代劇協会による『桜の園』公演は、現時の注目すべき活動として、権威ある学術・文芸雑誌『帝国文学』でも十四頁にわたり紹介された。

① 秋庭太郎著『日本新劇史』理想社、一九五六年。下巻、三〇三―三〇七頁。

松本克平著『日本新劇史―新劇貧乏物語』一〇四―一二頁。

若月紫蘭「近代劇協会の『桜の園』」(『帝国文学』大正四年九月号)

アントン・チェーホフがその最後の戯曲である『桜の園』を書いたのは一九〇四年で、彼がその年独逸の旅行中に忽然として死ねると、やがて日露戦争は始まったのであった・・・

チェーホフは真実なる写真家であつて、その頭には社会も国家も理想も主義も何もなかった為に、その描写に於いて到底ドストエフスキーなどに見られるような深い物凄い徹底的なものを求むることはできないが、その作物は何れも独創的な個性の閃きに溢れたもので、赤裸なる現実の真を描写する技巧、殊にその好んで題材とせる日常生活の描写と取扱との巧妙なる点においては、容易に他人の追従を許さないものがある。すでに度々述べたが如く『桜の園』もまた日常生活の一個のシーンを取材としたものにて、其処には久しく地主の圧制に苦しめられた農民が、一旦解放されて都会に赴き、工場生活に入ると同時に、彼等の生活は再び束縛の絆に結ばれた労働者の生活となる一方に於いて、地主は変じて家主となり、田園は化して都会となり、その結果卑屈と虚飾と黄金の力は、忽然としてあらゆる道義や礼節や士風にとって代つて、滔々たる都会文明の呪うべき物質的功利的精力のみが支配せんとする忌々しき世相が描きだされているのであつて、人間の内界に隠れている奥深き姿は充分にえぐり出されているに非ざれども、なお桜の園を競売されて、住み馴れた大邸宅を落ち行くあわれなる地主一家の没落という一事に対する、人物や事象や、状況のあらゆる外面的委曲は、かなりに精細な顕微鏡的眼光と、豊麗なる会話と巧妙なる表現法とによりて、驚くべく如実に再現せられ、その根底に於いて一大乾流をなしつつある。彼が多くの作物の根本基調たる陰鬱の影と哀愁の調べとは、人をして作者とその時代とを彷彿せしめないではやまないのである。

『桜の園』に現れて来る人物の多くは、前にも述べたようにみずから自分の身を如何ともすることのできない、時代の潮流や周囲の社会状態や、こい云った不可抗的な運命の力に支配されていく、(個性を亡ぼす社会の)の犠牲であり、みずから進んで働こうとすべくあまりに力の弱い、実生活の敗北者と見るべき、意志の弱い露国の所謂インテリゲンチヤの代表者とも見るべき人々であるが、なおこの劇に於いては、新しき生活に対する希望の光明というものが描き出されている処に、この劇が同じ作家の他の戯曲といささか趣を異にし、ここに作者の幾分か進まんとする新たる傾向を窺い得ると同時に、この戯曲そのものの別種の価値が見られるのである……

俳優全体の出来栄から云うと、女優の方が遙かに上出来であって、就中未亡人の娘アニヤに扮した衣川孔雀の技巧はこの日の圧巻であつた。無邪気な可愛らしい少女としての情愛もあり、あどけなきもあり、役の理解もあり、地主の娘としての気品も備えて、この前の『死の勝利』に見たような白の上のいや味ある音声も現れないで、人をして何となく引きつけないでは措かないものであつた。これについて可成りに淋しい気分を表現し得たのは、その姉嬢のワリヤに扮した一条潮路である。恋すれど熱情の足りないやるせないような気持は、孔雀のアニヤと共に哀愁の種となるに充分なものであつたが、玉村歌路の扮した小間使も、彼女が自分の扮し得る技量を自らよく理解したるものとして称讃に値する出来であつた。女主人公のラネーフスカヤ夫人に扮した上山浦路の技巧も、近來かなりの進境を見せて、その音声のようやく洗練されて、嫌味のある地声の耳に障らなくなったことは、この上演に於いて殊のほか際立つて見え、所々に無理解の点が見につかないでもなかつたが、あの大役をあれまでにこなした手腕は、さすがにその熱心の致す所と見なければなるまい……

男役の方面に於いて割合に理解の閃めきを見せたのは、沢田正二郎氏のガエフにて、微細な表現に於いてはまた色々な欠点が見られないでもなかつたが、大体において空想的な意志の弱い未亡人の兄としての性格は面白く描きだされて、音声の出し方にもさしたる不自然の跡の見られなかつたのは嬉しいが、之に反して最も失敗の技巧を示したのは大学生の伊庭孝氏であつた……上山草人の老僕フィリスを称讃した批評家は少なくなかつたが、あの音声の高さでは平土間の半辺でも殆ど聞えなかつたそうである。①

築地小劇場の柿落としては『海戦』に続いて、チェーホフの『白鳥の歌』が提供され、ここでは男優ふたり、小堀誠と東屋三郎のみ舞台上に登場した。『海戦』の凄絶な演出と熱烈な劇評に比し、老優の独白を主とする『白鳥の歌』は寂漠として観客の反応も稀薄であつたが、七月上旬の第四回公演まで続けて提供される。ついでチェーホフの戯曲が組まれるのは、築地第二年の第二一回公演『桜の園』においてである。翌月刊行された機関誌『築地小劇場』には観客からの劇評五通が収録される。いずれもかなり長文であるが、主要な演技者を詳しく評した一文を抜粋する。

池田政一「これだけの『桜の園』が」(「観客席」『築地小劇場』第二卷第三号)

① 若月紫蘭「近代劇協会の『桜の園』(演劇月評)『帝国文学』大正四年九月号。八七、九一―九二、

劇を見てこんなに感激した事は近頃ない事だ。私は余りの嬉しさに恥ずかしいほど涙を拭はねばならなかった。随分苦心して抑えてはいたけれど、ともすれば隙を見て飛び出す私の感激の鳴咽は、幾度隣の人をして振りかえらしめた事か。実際私にとってあれだけの演出を、決して舞台に向って話しかける事もなしに、じっと見物席にしがみついて見ていなければならないと言う事は、容易ならぬ努力を要することであった。眼の前に自分の肉親の者が苦しんでいる。慰めてやりたいのだ。彼等は悲しんでいる。自分も共に泣いてやり大のだ。・・・

いま静かに眼をつむると、涙ぐましいまでに懐かしい『桜の園』の場面々々が現れてくる。まったく日本にいてこれだけの『桜の園』が見られるようになったという事は、なんと云って喜んで良いか分からない。劇場側の人々に厚く感謝する。・・・

フィルス。汐見洋の老僕。劇を見ていながら、フィルスが舞台に現れて来るのがどんなに楽しみだったろう。恐らく日本中で何処を探してもこの役をこのくらいにしこなす人はないと思う。年寄りらしい注意が、小さなところまでも働く主人思いなところや、ことにぶつくさ口の中でなにやら聴き取れぬ事を言っているところなど、まことに立派な演出である。私はこの役で初めて汐見の真価を知った。彼が天才的な、ある貴いものを持っている事を感じた。・・・

アーニヤ。若宮美子の娘役。築地にこんな名優がいようとは思わなかった。実に無邪気な可愛らしい良いアーニヤだった。私は今までにこんな純真な少女を、実際にもまた舞台の上にも見た事はない。水谷八重子や夏川静枝等に見る、いくら上手にやってもどこか役者臭い、お芝居臭い少女とはまるで違った、純真そのもの、少女そのものだった。ことに叔父が、領地は売られないと誓った時、しゅれるような嬉しきで「叔父

さん、あなたはなんて良い人でしょねえ、なんて賢い人でしょねえ、私安心してよ。わたし嬉しい！」そう云ってガーエフを抱くところなどは、あまりの愛らしきに到底涙なしにはみられなかった。私は今度の若宮には、表情よりも科白と動作を採る。

ラネーフスカヤ。花柳はるみの夫人役。勿論まったく完全なものだとは言えない。しかしながら扮装だけならいざ知らず、一全体としてこれ以上の効果をあげうる女優を、いまの日本から探すという事はほとんど不可能といって差し支えなからうとおもう。実際世界的な意味から言えば、いまの日本には一人の女優もないと言って良いのだから。花柳という人、内生活がどれだけ豊かであるかは知らないが、この大役をよくもこれだけやってのけてくれたということは実に賞讃に値する。つくりが若いとか声が若いとかいう事は別として、ともすれば顰め面をして固くなり過ぎる嫌いはあった。これも恐らく年齢の相違から来る不自然さを消すための一つの技巧であるのかも知れないが、なんとなくしっくりしないところがある。全く荷も重すぎるし、無理でもあるせい、四幕目あたりでは大分疲れて見えた。しかし今思い出すだけでもおのずと頬笑まれるところの、いくら花柳に感謝してもし切れない良いものが一つある。それは笑い声だ。淋しく懐かしい、魂の底まで浸み込んでくる、あの透明な笑い声だ。・・・

トロフィーモフ 千田是也の大学生。「おや、これが日本人か。」初めて舞台に出た時すぐそう思った。それくらいこの人の扮装も動作もお国離れがしていた。誰が見てもこれは露西亞人だ。他のひととの調和という点から言えば、露西亞人であり過ぎるくらい露西亞人だ。・・・

ワリーヤ 山本安英安江の養女。衣服そのものにも示されている宗教的な、気の小さい苦勞的な實際的なワリーヤを見せていて、よい出来だった。アーニヤとの性格の相違が実に判明していた。・・・

シャルロット 田村秋子の家庭教師。ヤーシャと同じように自分勝手な人間だが、ヤーシャほどの狡猾さはなく、むしろ偏狭な涙をもっている。私がこの『桜の園』のなかで一番不幸な人間と思っているシャルロットを、かなり軽い浮いた気性にパツとやってのけてくれた。①

築地小劇場でチェーホフの戯曲に係って花柳ますみは、大正十四年『桜の園』に続いて五月に『三人姉妹』、十月には『伯父ワアニヤ』および『熊』と出演し、さらなる大成も期待される。しかし、この年を最後にして彼女は外部における恋愛問題のもつれにより築地小劇場から去った。村山知義らと劇団心座を結成しつつあった作家舟橋聖一の回想には、こうした花柳の活躍と去就が手短かに語られる。②

「花柳はるみ」(舟橋聖一著『わが女人抄』)

私がこの名を忘れないのは、そもそも私の戯曲がはじめて舞台上上演されたときの主演女優だからだ。その幕明きを私は胸を轟かせてまったのである。・・・大正十五年五月神楽坂の牛込会館で、研劇協会という劇団が、私のものを取り上げてくれたのが、うまれてはじめての舞台上演であったのだ。それが『朱門』

① 池田政一「『桜の園』の十日間」『築地小劇場』第二巻第三号、八〇―八五頁。

② 浅野時一郎著『私の築地小劇場』一一―一二四、一三四―一三五頁。

の一月号に載った『骨』という一幕物で、表現派気取りの暗い芝居だった。・・・

彼女は豊かな肉体美人だった。マスクも大きく、おカッパ風断髪で迫力があり、台詞の発声もよく通った。この劇団とどういう関係が知らなかったが、『骨』の装置をした村山知義氏などに、高飛車な物言いをしていたので、駆け出しの私は近寄りがたい気がした。

それもそのはず、すでに大正十三年十月の築地小劇場ではブーリキーの『夜の宿』でナスチャをやり、世評高かったカイゼル作『朝から夜中まで』にも婦人および娼婦の二役を振られ、大正十四年の二月チェーホフ『桜の園』ではラネーフスカヤ夫人、ハウプトマンの『寂しき人々』ではアンナ・マアル、五月のチェーホフ『三人姉妹』ではマーシャに扮した。ほかにもストリンドベルヒの『爛醉』、アンドレニーフの『横面をはられる彼』、ウェデキントの『春の目ざめ』などでも、みな主演的キャスティングを与えられている。すなわち当時の築地小劇場ではなくてはならぬ花柳はるみだったのである。・・・

それが系の切れたように築地小劇場から消えたのは、どういう事情があったか、私は全く知らない。花柳はるみにとってはこれが第一のつまずきであった。しかし、そのために黒木照と改名して私の『骨』に出演し、また心座に新加入して私の『白い腕』や村山君の『兄を罰せよ』にも登場することが可能となったのである。・・・

そのうちに東大出身の真面目な国文学の先生と意気投合して、家庭夫人におさまるや、あんなに好きだった舞台に何一つ未練なく、あっさり別れを告げてしまった。私も大正末期から今日まで、大勢の女優に会っ

てきたが、花柳はるみほど引き際のあざやかな人は見たことも聞いたこともないのである。①

築地小劇場において『桜の園』が再演されるのは、二カ年を隔てた昭和二年二月である。その前年には坪内逍遙作『役の行者』など邦人による戯曲の採択や興行路線への異論に発する離脱など、劇団には重大な変動があった。主役が花柳はるみから東山千栄子へ引き継がれたのをはじめ、演技陣は一新されたが、今回も期間を延長して大成功を収める。初演とは異なり、再演をめぐる劇評が僅少のなかで、浅野時一郎の回想が舞台の様子を端的に伝えている。

『桜の園』（再）（浅野時一郎著『私の築地小劇場』）

東山がラネーフスカヤ夫人を演じたのは、この時が最初である、品格はあり、押し出しもりっぱなので、初演の時の花柳はるみより、適役に違いなかったが、せりふが甘くて実のはいっていないような感じがするのと、仕草に不意な、ふだんの動作をそのまま出したようなところの混じるのが欠点であった。もっとも鍛えなければ、せつかくの容姿がむだになりはしないかと思わせる出来であった。ロバーヒンは丸山が初めて演じた。なかなか身だしなみのよい、新興階級の商人で、農奴上がりということに拘泥する必要はない役であるが、最初は少し柄が合わないような気がした。しかし、幕が進むにつれてよくなった。伊達のト

① 舟橋聖一著『わが女人抄』朝日新聞社、一九六五年。三〇一―三〇四頁。

ロフィーモフは千田に似ていたが、あんな粗雑な力は感じさせなかった。その他村瀬のアーニヤ、岸のシャルロッタ、高橋のドウニャーシャ、楠田のビイシチック、三浦のエビホードフ、新実の浮浪人など、山本のワリーヤと汐見のフィルスを除いた役々が、みな初演とは違ってしまった。これらの役をやった人たちは丸山と田村を除いて、もう劇場にいないのであった。

この芝居は大たりで、日延べをして二四日間演じた。『役の行者』の記録を上回る成功である。それだけ舞台には未熟さが減って、芝居らしくなっていたのである。①

『桜の園』は帝国劇場での初演以来、小山内薫がとくに愛着した作品として、昭和四年彼の追悼公演にも選ばれた。築地小劇場で東山千栄子がラネーフスカヤ夫人に扮するのは、第三年再演と追悼公演のみであるが、以後三五年間に彼女の代表的レパートリーとして出演回数は三百近くに及んだ。

『桜の園』への出演（東山千栄子著『私の歩んだ人生』）

研究生になって一年たらずの大正十五年一月、私はじめて主役らしい役をいただきました。とにかく公演が多く人手が足りずの状態でしたし、またメチネーもあったりで、こういうことになったのでしょう。演目はメーテルリンクの『タンタジールの死』という象徴的なドラマで、そのタンタジールという少年の姉イ

① 浅野時一郎著『私の築地小劇場』二〇〇―二〇一頁。

グレーヌ」でした。

築地小劇場には小山内先生、土方先生、そして青山先生と三人の演出化がいっしょにいましたが、そのうち青山先生は俳優としての経験もかずかずおありになり、もっとも適任者でしたので、いつも演技指導にあたっておいででした。青山先生は文字通り手取り足取りで私たちを教えてくださいました。でも私は不器用ですし、年もとっておりまうので、若い方のようにスツとはいれないのです。先生は「芝居を教えるには白紙のほうがよい」とおっしゃいましたが、しかし「東山さんは白紙は白紙でも油紙ですね」ともいわれました。つまり私は、せっかく先生が教えてくださるものを、うけ入れないではじき返してしまうということなのです……

昭和二年二月のはじめにシェークスピアの『マクベス』が上演され、なくなられた丸山定夫さんがマクベスで、私はその夫人の役をいただきました。これは大役でとてもむずかしく、劇団のおけいこdけでは間に合いませんので、夜の芝居の終わったあと、先生はわざわざ私の家までおいでになって、教えてくださいました。しかし、せりふに一生懸命になれば動きが留守になり、動きに注意すればせりふが留守になるというふうで、いくら教えていただいてもうまくゆかず、とてもむずかしゅうございました……

同じ月にチェーホフの『桜の園』が上演され、私はこのときはじめてラーネフスカヤ夫人の役をいただきました。このようにして駆け出し女優の私に大きな役がいくつもつくというのは、中年の役をこれまでやっていらした花柳はるみさんが、劇団をお退きになったため、その花柳さんの役どころが私に回ってきたからでした。ラーネフスカヤ夫人もそうですし、同じチェーホフ的一幕物『熊』の未亡人も、アンドレーエフの『横っ面をはられる彼』の、サーカスの獅子使いジニーダの役も、再演のとき私に回って来たのですから、重

荷といえたいへん重荷でありましたが、つくづく幸運だったと思います。もしそのときの私が若かったら、柄からいっても、こういう中年の役はいただけなかつたでしょう。また、中年からこの道にはいったため、それまでの生活や経験が俳優になってからのプラスになっているとも考えられます。どうも私はたいへんいい星の下に生まれて来たようでございます。

『桜の園』は、モスクワ芸術座でとっていらしたノートをもとにして、小山内先生の演出でした。先生は、私が外国で、しかも脚本の舞台になっている帝政ロシアで暮らしたことがあるし、年配としてもラーネフスカヤ夫人と同じくらいなので、この役をくださったのでしよう。しかしその私はかつて本場のモスクワ芸術座でこのお芝居を見て、たいへん感激したといっていますが、その感激はしよせんろうとのそれにすぎませんので、実際の技術のうえではほとんどなんの役にも立ちませんでした。あとで小山内先生は「東山さんならそのままでラーネフスカヤ夫人になれると思っていたが、やはり芝居というものは違んですねえ」とがっかりなさいました。

でもその後『桜の園』にはどういうわけかずいぶん出演の機会に恵まれました。そしてやがて私は、七十歳の年を過ぎるまで、合わせておよそ三百回前後もラーネフスカヤ夫人を演じたのでした……

(昭和二十年) 戦争が終わったとき、私たちはみんなやせておりました。でもみんながホッとししました。そして、その年の十二月有楽座で新劇合同公演として『桜の園』が上演されました。ながい間の圧迫から解放された喜びと、将来に対する明るい希望とが、わかれわかれになっていた新劇人を期せずして一つの公演に結集させ、さらにそれが新劇を愛してくださるお客様とむすびついたわけでした。

演出Ⅱ青山先生、ガーエフⅡ薄田研二、ワーリヤⅡ村瀬幸子、アーニャⅡ丹阿弥谷津子、ロバーヒンⅡ三

島雅夫、トロフィーモフ、千田是也、ビーシチック、三津田健、シャルロッタ、岸輝子、エビホードフ、滝沢修、ドゥニーシャ、杉村春子、フォールス、中村伸郎、ヤーシャ、森雅之、駅長、宮口精二、婆や、南美江、浮浪人、龍岡普、そして私のラネーフスカヤ夫人という配役でした。・・・

三五年一月末から四月末までの各日曜日、劇団で私の七十歳を記念して『桜の園』を日曜劇場公演でいたしました。千田さんの演出にはますます喜劇としての色彩が加わり、私もまた先年来日したモスクワ芸術座の『桜の園』に刺激されて、新しい意欲をもって立ち向かいました。

三八年九月には四六年ぶりに海外旅行をいたしました。共産圏諸国の演劇視察というようなことで、文学座の杉村春子さんと長岡輝子さん、演劇評論家の戸板康二さん、倉橋健さん、日下令光さん、俳優の金子信雄さんと波野久里子さん、それに俳優座の岸輝子、村瀬幸子さん、永井智雄さんと私の一行十一人。最年長の私が団長ということでした。

四六年ぶりに訪れたモスクワは感慨深いものでございました。道路がすばらしくりっぱになり、公共施設が完備されたことに目を驚かされました。しかしまた、クレムリン宮殿をはじめ、まるで昔どおりの姿を見せている建造物もたくさんありました。私が『白鳥の湖』のバレエをはじめて見たポリショイ劇場など、昔のままというより、まったく同じものが新たに建てられたのかとさえ思われる美しさでした。①

初稿 二〇二五年八月八日

① 東山千栄子著『私の歩んだ人生』三六―四〇、七四、九九―一〇一頁。